

やがんだけで正当化

卑劣な性犯罪が後を絶たない。加害者はどんな人たちなのか。特徴を探ると、独特の考え方があらわってくる。

目鼻立ちのくつきりした顔、均整のとれた体つき。大学を卒業後は、会社勤め。未婚だが、

何人かの女性と交際してきた。

この40代の男性は、見た目は、危険さを感じさせないが、性犯罪歴をもつ。

30代のとき、夜間に帰宅途中の女性に襲いかかり、強制わいせつ致傷罪で服役。出所して1年もしないうちに、やはり夜間帰宅中だった女性を襲い、強姦

未遂罪で有罪判決を受けた。男は言う。

「やめたいと思つてゐるのです

が……」

被害者的心に深刻な傷を残す性犯罪。強姦や強制わいせつなど悪質性が極めて高い事案でも、犯人の判明後、「まさかあの人

が」と周囲が驚くことは珍しくない。裏を返せば、性犯罪者の「タイプ」を描き、防犯につなげることは難しい。

が嫌がつてゐるよう見えて、

それでも、専門家の分析など

から、性犯罪者の特徴を、いくつか知ることができる。

顕著なのが、「認知のゆがみ」と呼ばれる、独特の判断や見立てだ。犯罪心理学が専門の越智啓太・法政大学教授は言う。

「強姦などの凶悪性犯罪を犯す人は、他人の立場になつて物事を

を考えることができない。共感

が不足している。例えば相手

が嫌がつてゐるよう見えて、

心の底ではそれほど嫌がつてい

ないはずなどと、自分に都合のいいように思い込む

共感力が乏しい理由

前出の男性にも、その傾向はうかがえる。裁判で、犯行について問われると、こう答えた。

「向こうもその気にならないかと……。押さえつけはしましたが、同意してくれないかと」

心理学者や警察官（科学捜査研究所勤務）らによる共著『性犯罪の行動科学』（北大路書房）によると、性犯罪研究者（みられがちな考え方の例として、次のようなものが挙げられている。

▽肌の露出が多い女性はみんなレイプされることを望んでいる（二分法的思考）

▽勘違いさせるような態度を相手がとった（正当化）

▽相手は出会い系に登録しているような娘だから問題ない（合理化）

▽このような行為は、やめようと思えばいつでもやめられる

（コントロールの過信）これらはあくまで考え方の「傾向」だ。こうした考え方をする人が必ず、性犯罪を犯すわからない部分が多いが、専門家たちは、育成過程での出来事が関連していると指摘する。

そのひとつが虐待経験だ。虐待されると、子どもは心身に深刻な苦痛を受ける。それに押しつぶされないよう、物事に対しても独自の解釈（苦痛を苦痛と感じなくて済む方法）を身につける。それが、共感力の乏しさにつながる場合もあるとされる。

先の書籍は、ニュージーランドの刑務所の受刑者を対象にした2008年の調査を紹介している。それによると、性犯罪ではない罪で服役している人のうち、性的虐待を受けたことがあるのは28%。身体的虐待は12%だった。それに対し、強姦の罪で服役している人では、性的虐待を経験した人は約7割に達し、身体的虐待も半数が受けっていたという。

虐待以外の親の行動も、影響が大きいとされる。多くの子どもにとって、親は社会規範を体現する存在だ。その親が、性的にルーズに振る舞えば、子ども



「このくらいのこと事件にはならないだろう。そんな甘い状況認識で、卑劣な行為に走る性犯罪者もいる（写真と本文は関係ありません）

れるものとみなす場合もある。

前出の性犯罪歴がある男性も、子どものころを振り返って、こう話す。

「幼稚園か小学校低学年のころ、父親とプールに入っていたとき、父親が偶然を装つて、女の人のお尻を触るのを見たんです。デパートでそれ違いざまに、女人の人のお尻を触ったのを見たことも。それが、自分の中でトラウマになっています」

「自分勝手かもしれません、自分がこういう犯罪を犯すのは、父親の影響もあると思います。親は見本なんだから、俺もやつていいんじゃないかと」

また、ケガなどをきっかけに脳の機能障害が起こり、それが判断に影響を及ぼす場合もある。会社経営者としての手腕を評価され、家庭にも目立つた問題のなかつた50代の男性。運転し

ていた自動車が事故に遭ったの

を境に、公園での性器の露出や万引きなどをするようになつた。

仕事でも、外部から持ちかけられた話に二つ返事で応じて、後で困ることが増えた。精神科医で性障害専門医療センター代表の福井裕輝さんが原因を探つたところ、脳の一部に問題が見つかつたという。

性欲より力への欲求

「抑制を司る部分が損傷し、何かをしたいと思つたら、後先考えずにしてしまう状態でした」

(福井さん)

これまで福井さんがみてきた性犯罪者たちの中には、脳の機能障害が確認できた人も少なくないという。

性犯罪はかつて、「抑えきれないと望む人の中には、ときに暴力をふるいながら、嫌がる相手への性的行為を強行することで、その目的を果たそうとする人がいる」という見方が有力だった。

ただ、越智教授も話すとおり、

「強姦は性欲がたまっている人

が犯すと、一般に認識されています。実際、そうしたケースもあるのですが、性欲より

への欲求が犯行へと駆り立てて

いる事案が、数多くあります」

前出の越智教授は、こう話す。

ふだん、自分の「影響力」を実感できる機会は、ほとんどの人にとって、そうあるものではない。反対に、職場で上司に叱責されたり、家庭で無視されたりするなど、自分の立場の弱さや存在感の小ささを感じる場合は、比較的多い。

そんな状況で、自分の「力」を実感したり、誇示したりしたいと望む人の中には、ときに暴力をふるいながら、嫌がる相手への性的行為を強行することで、その目的を果たそうとする人がいる」という。

ただ、越智教授も話すとおり、

性欲が動機の中心とみられる性

犯罪が起きているのも事実だ。前出の男性も、強姦未遂事件の裁判で、

「事件を起こしたのは、性欲を抑えきれない、というのが大きいかつたのかね」と裁判官に聞かれ、

「最終的には、そうだと思います」

と答えていた。過剰な性欲は、医学的には「色情症（ハイパー・セクシュアリティー）」と呼ばれ、脳の一部の機能障害などが原因と考えられている。もちろん、

性欲が非常に強いことが、性犯罪に直結するわけではない。ここまでみてきたような特徴は、性欲が浮かぶかどうか

親の顔が浮かぶか

親の立場で、自分の子どもが性犯罪の加害者にならないために、何ができるのか。越智教授は、わが子が性犯罪者の特徴と重なるかに気をつかうより、親子の関係をよくすることにエネルギーを注ぐべきだと強調する。「性犯罪に限りませんが、子どもが最後に犯行を踏みとどまるのは、親の顔が浮かぶかどうかが大きい。親の愛着を日ごろ感じているかどうかが、大事」

つていて人物に対し、性犯罪の危険性を理由に何らかの措置を取ることは、認められていない。そもそも、実際に性犯罪を犯す人はごく一部であり、特徴がみられるからといって、犯罪と関係のない人も一緒にたることは、あつてはならない。